

パートII. 旧約時代

11章 士師記の時代から王制へ

イントロダクション

1. 「神の国と悪魔の国の葛藤」というテーマに沿って聖書を読み解いている。

(1) この葛藤は、創世記3章以来続いているものである。

(2) この葛藤は、黙示録20～21章で終わる。

2. パートI. 葛藤の舞台設定 (1～3章)

(1) 神は、人類を臣民とする神の国を造ろうとされた。

(2) サタンは、悪魔の国を作り、自らが王になろうとした。

(3) 神は、創世記3章15節で対抗策を啓示された (原福音)。

3. パートII. 旧約時代 (4～17章)

4章 カインとアベル

5章 大洪水

6章 バベルの塔

7章 アブラハム契約

8章 出エジプト

9章 律法と幕屋

10章 カナン定住と士師記の時代

11章 士師記の時代から王制へ

(1) サタンはなぜ王制を好んだのか。

(2) 神はどのような対抗策を採られたのか。

4. アウトライン

(1) 民の霊的状态

(2) サムエルの登場

(3) 王を求める声

(4) サウルの登場

士師記の時代から王制への移行について学ぶ。

I. 民の霊的状态

1. 士師記の時代は、背教と混乱の時代であった。

(1) この状況に終止符を打つために、神はサムエルという器を用意された。

(2) 士師記の時代は、預言者の時代に向かう移行期であった。

- ①モーセ・ヨシュアの時代は終わった。
- ②まだ預言者の時代が到来していなかった。
- ③1サム3:1b

1Sa 3:1b そのころ、【主】のことばはまれにしかなく、幻も示されなかった。

2. イスラエルの民の信仰は、風前の灯のように消えかかっていた。

(1) 大祭司エリの目は、かすんできて、見えなくなっていた (1サム3:2b)。

- ①肉体の目とともに、霊的な目もかすんでいたことを表わしている。
- ②彼は、息子たちの暴走をくい止めることができなくなっていた。

(2) 指導者がいない民は、滅びるしかない。

- ①この状況の中に神が介入された。
- ②サムエルは、イスラエルに霊的覚醒をもたらす神の器である。

II. サムエルの登場

1. サムエルは、祭司と預言者という二重の召命を受けた。

(1) 不妊の女であったハンナは、【主】に祈って息子を得た。

- ①彼女は、その息子をサムエルと名づけた (【主】は聞かれる)。
- ②彼女は、サムエルを【主】の働きのために献げた。

(2) 少年サムエルは、【主】からの語りかけを受けた (1サム3:1~14)。

- ①彼は、大祭司エリの子の没落をそのまま預言した。
- ②これが、サムエルの奉仕の始まりであった。
- ③預言者は、神のことばをそのまま民に伝える。

2. 大祭司エリが死に、サムエルが霊的指導者となった。

(1) ペリシテ人との戦いで、神の箱が奪われた。

- ①その知らせ受け、エリは首を折って死んだ (享年98歳)。
- ②神の箱が奪われたことで、イスラエルは国家存亡の危機に直面した。
- ③その後、契約の箱はペリシテの地からイスラエルの地に返還された。
- ④回り回って、キルヤテ・エアリムに20年間とどまることになる。

(2) 成人したサムエルは、ミツパの集会において、イスラエルをさばいた。

- ①イスラエルの全家に向かって、偶像礼拝を悔い改めるように激しく迫った。
- ②民は直ちに、バアルやアシュタロテを除き去った。

③その結果、建国以来最大のリバイバル（宗教改革運動）が起こった。

(3) このリバイバルは、イスラエルに4つの祝福をもたらした。

①40年にわたるペリシテ人の支配が終わった。

②失っていた領土を取り返した。エクロンからガテに至る地域。

③ペリシテ人との戦いが止んだ。再開されるのは、サウルの時代に入ってから。

④アモリ人の間に平和が訪れた（東の国境地帯も平和になった）。

3. サムエルは、生涯現役を貫いた。

(1) 1サム7:15

1Sa 7:15 サムエルは、一生の間、イスラエルをさばいた。

1Sa 7:16 彼は年ごとに、ベテル、ギルガル、ミツパを巡回し、これらすべての聖所でイスラエルをさばき、

1Sa 7:17 ラマに帰った。そこに自分の家があり、そこでイスラエルをさばいていたからである。彼はそこに【主】のために祭壇を築いた。

①ベテル、ギルガル、ミツパを巡回し士師としての務めを果たした。

②人々が難問題の解決を求めてやって来たとき、それに回答を与えた。

③これら3つの町に、「預言者のための学校（塾）」を設立した。

④巡回奉仕が終わると、ラマの家に帰り、そこでも士師としての任務を果たした。

(2) 70歳になった頃、2人の息子を士師に任命し、ベエル・シェバに派遣した。

①南部地方は息子たちに任せ、自分は北部地方だけをさばくことにした。

②しかし、それは失敗に終わった。

③息子たちは、父サムエルとは異なり、賄賂を取って裁きを曲げたのである。

④サムエルもまた大祭司エリと同じように、息子の養育に失敗した。

⑤ここに、サタンの妨害を見ることができる。

III. 王を求める声

1. 12部族の長老たちが、王を与えて欲しいと要求した。

(1) 民のこの要求は、悪魔の誘いによるものである。

2. 悪魔は、それまでの経験を通して教訓を学んだ。

(1) 士師たちの時代が続く限り、背教は地域的なものにとどまる。

①このままでは、全イスラエルを墮落させるのは不可能である。

(2) 王政に移行すれば、王の墮落が全イスラエルの墮落につながる。

- ①当時、イスラエルの政治形態は神政政治であった。
- ②神が王で、神は預言者や士師を通して民に語りかけていた。
- ③しかし民は、それよりも人間の王に信頼を置く政治形態を求めた。

3. サムエルは、神の御心を求めた。

- (1) サムエルは、不愉快になったが、【主】に祈ると、次のような答えがあった。
 - ①民の言う通りにせよ。
 - ②彼らは、サムエルを退けたというよりは、神ご自身を退けたのである。
 - ③これは新しいことではなく、民の歴史上いつも起こってきたことである。
 - ④民を治める王の権利を民に知らせよ。

4. サムエルは、王政には犠牲が伴うことを民に説明した。

- (1) サムエルの警告
 - ①王は、息子たちを徴兵し、戦士として使役するようになる。
 - ②王は、娘たちを取り、王宮で仕えさせるようになる。
 - ③王は、新たに税を徴収し、民は重税で苦しむようになる。
 - ④王は、奴隷や家畜の中から最上のものを取り、仕事をさせるようになる。
 - ⑤それまで民が持っていた自由は、かなりの程度制限されるようになる。
- (2) 民は、その警告に耳を傾けず、他国民のようになりたいと王を求めた。
 - ①ここでの民の罪とは、神を退け、人間の王に頼ろうとしたことにある。
 - ②もう一つの罪は、神の時を無視して王を求めたことである。

IV. サウルの登場

1. 神は、イスラエルに王が必要になることを予知し、人材を用意しておられた。

- (1) それがダビデである。
 - ①ダビデは若過ぎたので、サウルが王に選ばれることになった。
 - ②神の時を待てない者は、必ず墓穴を掘るようになる。

2. イスラエルは、サウルを王とする王政（統一政府体制）に移行した。

- (1) 悪魔にとっては、一挙に契約の民を墮落させる好機が到来したことになる。
 - ①これ以降悪魔は、サウルを標的として激しく攻めた。

3. 即位して2年後、サウルは【主】に背き、誤った判断を下した。

- (1) 祭司にしか許されていないいけにえを、自らの手で献げた。
 - ①サムエルからその罪を糾弾されると、自分を正当化する理屈を並べ立てた。

②神は、聖霊をサウルから取り去り、ダビデにお与えになった。

(2) それ以降サウルは、より激しい悪魔の攻撃にさらされることになる。

①1サム 16:14

1Sa 16:14 さて、【主】の霊はサウルを離れ去り、【主】からの、わざわいの霊が彼をおびえさせた。

(3) サウルの性格は、異常なものに変質していった。

①常軌を逸した自己愛

②異常なほどの嫉妬心

③全的墮落

4. 神は、ペリシテ人との戦いを用いて、この状況に介入された。

(1) サウルは、ギルボア山でのペリシテ人との戦いで戦死した。

①3人の息子（ヨナタン、アビナダブ、マルキ・シュア）も戦死した。

②ペリシテ人たちは、特にサウルとその息子たちを狙い撃ちにした。

(2) サウルが戦死したのを見て、イスラエル人たちは、町々を捨てて逃走した。

①その後にペリシテ人がやって来て、そこに住むようになった。

②イスラエルの人々が築いてきた町々が、敵の手に渡ったのである。

(3) まとめ

①王としてのサウルは、最初は素晴らしいスタートを切った。

②小さな不従順の積み重ねにより、【主】に反抗することが習慣になった。

③その背後にサタンの策略があった。

④神は、サウルと息子たちを戦死させることで、悪魔の策略を阻止された。

⑤次に神が立てる器は、ダビデである。